

# 富山で育つ宿根草の組み合わせとデザイン ～ 37 タツタナデシコ ～

職藝学院

教授 渡邊 美保子

タツタナデシコは、ヨーロッパ原産の常緑の宿根草です。花の色は、桃、濃桃、白などがあり、5月中旬から下旬にかけて開花します（写真1）。花には甘い香りがあり、開花した時の草丈は25cm位です。花が咲き終わっても青みがかった銀灰色の葉が美しいので花壇の縁どりに植えると明るい印象になります。

タツタナデシコの葉は向かい合って茎をくるむように付きます。4月中旬になると、細長い葉が垂直に並んで青緑色のハリネズミのような姿になり、花茎が上がってきます。花が咲く前のつぼみは、筒状のキャップのようなものの中で守られています。これは萼筒といいます。萼筒から渦巻き状に折りたたまれたつぼみが顔を出し、桜色のソフトクリームのような形になると翌日には開花します。茎の先端の花が咲くと、必ずその下でつぼみが順番待ちをしています。一つ咲くと数日後にはその下の花も咲き、数日後には、またその下の花が咲きます。

タツタナデシコは5枚の花びらを持ち、花びらの縁にはたくさんの切れ込みがあります。花の中心を見ると、赤色の絵の具を付けた筆で丸を描いたような模様が見えます（写真2）。花が開いたばかりの花びらは白色で、中心の模様は鮮やかな赤色です。7日ほどかけてこの赤い色が花びらの先に運ばれて全体が桃色に染まってゆきます。開花して2日後には2本の雌しべが出てきて、先端はくると丸くなります。花の香りが強くなるのはこの頃です。花びらは、7日ほどでくたびれてゆき、いったん透明になってから干からびて知らぬ間に落ちてゆきます。萼筒は緑色のまま残されるので花が終わってしまったような気分にはなりません。花が終わると開花した茎の基部は木質化してゆきます。そのため、木質化した茎は地面を横に這ってゆき、その先に新芽を伸ばすことを毎年繰り返して陣地を広げてゆきます。

タツタナデシコは、日当たりを好み乾燥にも良く耐えます。ヨーロッパ原産のため、酸性土壌はあまり好みません。中性程度であれば花付きも良いようです。水はけの悪い所や常に湿っている所では、木質化した茎が湿気を嫌い枯れてゆくので植え付ける場所に注意をしましょう。



写真1 桃色のタツタナデシコとリシマキア・ヌムラリアの品種オーレア（手前）。5月下旬



写真2 タツタナデシコの本の花茎。向かって左の花は開花して9日目様子。一つの花は12日間ほど咲く。中央の花は開花したばかりで、まだ雌しべが出ていない。向かって右の花は、開花2日目、雌しべが出てきたところ。左上に見えるのがこれから咲くつぼみ。